

シネマ通信

第23号(2026年7月22日)



プライベート・ケース

第23回鑑賞作品

監督／脚本：レベッカ・ズロトヴスキ

出演：ジュディ・フォスター(リリアン・シュタイナー)、ダニエル・オートゥイユ(ガブリエル・アダッド)、ビルジニー・エフィラ(ポーラ・コーエン＝ソラル)他

アメリカ人医師リリアンは、パリで精神分析医として成功し充実した日々を送っていた。そんなある日、長年の患者であるポーラの訃報が届く。リリアンはその死に違和感を覚え殺人を疑うが、患者に対する守秘義務のため警察に相談はできない。

この件以来、理由無く涙が出る異変に悩まされることになったリリアンは、眼科医で元夫のガブリエルを訪れる。涙の原因は解明できなかったが、事件の究明をガブリエルが手伝ってくれることになり、二人で捜査に乗り出すが・・・

「羊たちの沈黙」「告発の行方」で2度オスカーに輝いたジュディ・フォスターの、フランス映画初主演作品。濱口竜介監督の「急に具合が悪くなる」で、本年度カンヌ映画祭で岡本多緒と共に女優賞を受賞したビルジニー・エフィラが共演しているのも見所です。

パリで成功した米国人
精神分析医リリアンに
患者の訃報が届く。だが
その死には違和感が・・・



About Them

「プライベート・ケース」の監督：レベッカ・ズロトヴスキは、1980年生まれのパリジェンヌ。2006年から脚本家としての活動を開始。5本の短編映画を手がけたのち、2010年に初の長編監督作品「美しき棘」を発表。同年のルイ・デリュック賞で、新人作品賞を受賞しました。本作で母を亡くした思春期の少女を演じたレア・セドゥは、セザール賞有望若手女優賞にノミネート。続いて、原子力発電所を舞台にした「グランド・セントラル」で再び、レア・セドゥを起用し、彼女をフランス映画界の若手トップ女優に押し上げました。同作品は第66回カンヌ映画祭で、フランソワ・シャレ賞を受賞。同年のカブール・ロマンティック映画祭ではグランプリを受賞。翌年のリュミエール賞では、ズロトヴスキに特別賞、セドゥには女優賞が授与されました。第67回カンヌ映画祭では、ディスカバリー賞、およびヴィジョンナリー賞審査員に選出されるなど、まさに順風満帆な監督人生。本作は、そんなフランス映画界きっての才人が、かねてから起用したいと願っていたジュディ・フォスターを主演に迎えた意欲作。二大陸が育んだ才能が出逢い、どんな火花を散らすか楽しみです。



About Something

この6月、シャンパーニュ地方の中心地、ランスに行ってきました。パリ東駅からTGVで45分。首都から十分に日帰りできる古都です。目的はシャンパンではなく、フジタ礼拝堂とランスのノートルダム大聖堂。特に、藤田嗣治が設計し、今も夫人と眠るこの礼拝堂には、いつか行ってみたいと思っていたのです。

駅からタクシーで数分、瀟洒な礼拝堂は、写真で見たとおりに芝生の中にひっそりと佇んでいました。内部は彼の最後の大作とされるフレスコ画で覆われ、まさに、フジタの世界。その片隅に、KIMIYO夫人が描かれていることを、受付のハンサムな青年が教えてくれました。

しかし、私が最も感動したのは、ジャンヌ・ダルクの助けでシャルル7世が戴冠式を上げたというランスの大聖堂。やはり、歴史の重みは凄い！！天を突くように高い天井、ゴシック建築の神髄と称されるがっしりとした骨組み、時代の流れを感じさせる多様なステンドグラス。観光客がチラホラ歩いていても、そこには、まるで中世の空気が漂っているようです。この中で、ジャンヌ・ダルクが人生最良の日を迎えたのかと思うと、ただ、ただ感無量。そして、何気なく壁に目を向けたとき、私は発見したのです。そこに、ジャンヌが居ることを！教会の外には有名な騎乗のジャンヌ像がありますが、内部のこの像はあまり知られていないようです。多分、戦いの後なのでしょう。甲冑を脱ぎ、目を閉じて立ちすくむその表情は、あまりにも悲しげ。まるで、自分の運命を予感しているかのようです。帰国後、私が最初にしたのは、録画したまま放っておいたリュック・ベッソン監督、ミラ・ジョヴォヴィッチ主演の映画「ジャンヌ・ダルク」を見ることでした。幼いときに神の声を聞き、その声の命じるままに短い一生を駆け抜けたジャンヌ。彼女の息遣いから、そのテンスの強さが、以前劇場で見たときとは比べものにならず強さで私に迫ってきました。

フランスを歩くと、ジャンヌ・ダルクの像や絵をアチコチで見ます。今でも、祖国を救った少女として、全国民に愛されているのでしょう。もしかしたら、この国の人たちは、自分たちの祖先が19歳の聖なる少女を、魔女として火刑にしてしまったことに、ごく軽い原罪意識を抱いているのかも知れませんね。

文責 安東桂子